「木がかわいそう」批判拡散

「世界一のツリー」虚飾が"炎上"招く

「何の変哲もない木だった」「気に留めたこともなかった」と、富山県氷見市の人たちが口をそろえるアスナロが「世界一のクリスマスツリー」の触れ込みで二十六日まで神戸市の港近くに立っている。ネットを中心に「木がかわいそう」などと批判が起こり、催しの中止を求めるネット署名も。主催者側は「言葉不足、誤解がいまの状況を作っている」と釈明に追われた。なぜツリーの炎上は燃え広がったのか。（加藤裕治）

東京から電車を乗り継いで約四時間。富山県氷見市は、寒ブリの水揚げで知られる。海に近いJR氷見駅から車でさらに三十分弱。一刎（ひとはね）の集落に着いた。

標高約二百メートルの里山で、春先には集落内の湿地にミズバショウが咲き誇る。高齢化が進み、地元の人によると、かつては百数十戸が暮らしていたのに、今は九十戸を下回ったという。

山あいの集落にしては広い道の横に、掘り返されたばかりの土の跡。アスナロはそこに立っていた。道を挟んで向かいに住む男性（七〇）が所有者だった。

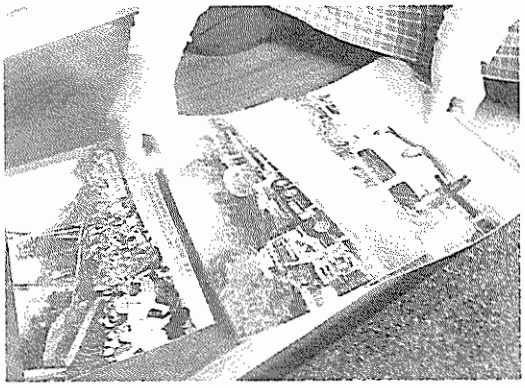
「自分の三代か、四代前の人が植えた木。五、六年前、氷見市の植物園の人から『クリスマスツリーに欲しがっている人がいる』と話が来た。最初は長崎のハウステンボスへ、ということだった。一回、話が消えて、神戸へとなった」

アスナロは根が弱いそうだ。「土がしっかりしてないとひっくり返る。そうなれば切るしかない。そんな木がツリーになるのなら」と話に乗ったという。「この木にしたのは広い道に近く、運びやすいからだったらしい」とも。

アスナロでなくよく似た「ヒノキアスナロ」ではとの指摘もあるが、妻（六九）は「区別してない。どちらもアテと呼んでいる。珍しい木じゃないちゃ」。周囲をみると、背の低い広葉樹の林には三十メートルはあろうかという杉やアスナロがあちこちから頭を出していた。

ちなみにツリーの主催側では「山火事から唯一、生き残った木」と説明していたが、妻は「木の前にあった家が燃えたことがあった。それを聞き間違えたのでは」と首をひねった。

集落を回ると「ツリーの話が出るまで、そんな木は知らなかった」と誰もが言う。そして、その木がなくなったことを惜しむ人、木を神戸に運んだことを批判する人はいなかった。



（上）神戸市でツリーになったアスナロが生えていた斜面（下）アスナロが運び出された時の写真を示す住民＝富山県氷見市で

提供の集落喜び「にぎやかに」

町内会長の池田六義さん（六八）は「運搬費で赤字になるような木に値が付き、運び出しもやってくれた。人も大勢来て、過疎の集落がにぎやかになった」。主催側の中心はプラントハンターの西畠清順さん。「西畠さんのおかげと地域としては喜んでいる」と語った。

ただ、ツリーの後「木材にして一部を鳥居にする」という利用方法への思いはさまざまだった。

池田さんは「生きたまま運んだのだから移植してほしかった」と残念がる。近所の外山京信さん（八二）は「十月にお寺であった報恩講で、西畠さんが『木を切って製品にする』と話していた。けど、すぐには切らないと思っていた。二年でも三年でもいいから残して、氷見の木を見てもらいたかった」。一方、別の男性（六四）は「そのうち倒れて、土に返るだけ。何人もの人に大事にされて幸せだろう。東京にいる息子からも『ツリーのニュース見たよ』と電話が来る。良かった。鳥居になるのも悪くない」と喜んだ。